

『深夜特急』

沢木耕太郎著／新潮文庫

学生時代に読んだ本の中で最も熱中し、最も印象に残っているものは、沢木耕太郎著の『深夜特急』です。同書は1986年から1992年にかけて順次刊行された四六判で3冊、文庫版では6冊におよぶ長編の海外旅行の記録であり、旅行後に著者が客観的に当時を振り返り、内容を整理した形で書かれています。対象となる旅は、大学を卒業し数年たった26歳の著者が、乗り合いバスでインドのデリーからイギリスのロンドンを目指す旅です。同書を本屋で見かけた際には、題名から夜行列車による旅を綴ったものだと勘違いしていたことが懐かしく思い出されます。

この旅は、乗り合いバスでインドのデリーからイギリスのロンドンまで行くことは可能か否かについての友人との賭けから始まっています。ほとんどの友人が不可能というところを、26歳の著者は可能であるとし、そのことを確かめるために旅立ちます。しかし、実際はデリーからロンドンまでの行程について綿密な計画をたてるわけではなく、バスやホテル等の予約は一切せず、予定・計画などは全くなし。所持品は、机の中の小銭までかき集めて作った2000ドル弱のお金、3日分の下着、長袖・半袖の服がそれぞれ1着、抗生物質と正露丸、アジアとヨーロッパの地図がそれぞれ1枚、3冊の本といったもの。これでアジアからヨーロッパを巡る旅になります。無計画なため、日本を出てから、本来の目的となる旅の出発地であるデリーに着くまでの間にも、香港、マカオ、バンコク、シンガポールなどアジアの都市で多くの時間を費やし、そのときの体験も併せて綴られています。

この本の最大の魅力は、ノンフィクションであるはずなのに、通常ではあり得ない体験が多く描かれている点にあると思います。実際に、このような旅を行った人がいると知った多くの若者が、同書に触発され、自分も体験してみようと、読んだ直後に成田空港から香港、マカオに飛び立ったという伝説もっています。実際に私の身近にも、同書を読んでインドに向かい、長期間同地で過ごした人がいました。要は、若者の旅の魅力がいっぱいなのです。

私の読後感は、自分には到底このような旅はできないというものでした。それでも、何も知らないところに、言葉が話せるでもなく、余分なお金があるわけで

もない状態で行くことのできる勇気（蛮勇というべきものか）には、強いあこがれを感じたものです。読後10年以上経過しましたが、今でもたまたに深夜特急のような旅をしたくなる衝動にかられます。そのくらい印象に残る一冊です。

執筆者紹介

田浦 裕生

機械系助教。専門領域は、トライボロジー、ロータダイナミクス。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『深夜特急』全6巻 沢木耕太郎著 新潮文庫 1994年 2,600円

[ブックガイド目次へ](#)